



## <2023 年を彩った色>募集中

日本色彩学会は、一年を代表する『今年の色』の募集を開始いたしました。

『Most Impressive Color 2023』～2023 年を彩った色～として、一年間を色彩という目線から振り返り、その年のイメージを共有する 2023 年を代表する色を募集中です。その決定結果は 2024 年 3 月 20 日(水・祝)の International Colour Day(国際色彩デイ)で表彰式で発表されます。

応募資格は、日本色彩学会員、非会員を問わず、色彩に興味のある方であれば、どなたでも応募可能です。

日本色彩学会のホームページから応募してください。応募期間は、2023 年 10 月 15 日(日)から 12 月 15 日(金)までです。

Most Impressive Color の募集は、毎年実施されていますが、できれば、第一回からの選考の結果と、選定の根拠を、ホームページの分かりやすい場所に、提示していただくと、応募の促進に寄与すると思しますので、担当の委員会で検討していただければ幸いです。また、学会らしさを出すために、次年度から、「一色提示」と、「二色配色提示」の二部門制にすることも、お考えください。

(学会メールニュース No.444 から引用)

## 宮澤賢治が新造した蒼鉛色の意味

宮澤賢治が多用する「青色」の一種類には、「蒼鉛(そうえん)色」という色名もある。

蒼鉛色の「蒼鉛」は、銀白色の柔らかくて脆い金属である。英語では bismuth、元素記号が Bi の金属で、表面が酸化されると、その酸化膜で光の干渉が生じ、淡い赤みを帯びたり、淡い虹色を呈したりすることがある。

蒼鉛が単体で産出される場合には、「自然蒼鉛」とか「自然ビスマス」と呼ばれる。

天然では、主に硫化鉛物の一種として産出されており、「輝蒼鉛鉛(きそうえんこう)」と呼ばれる。輝蒼鉛鉛は、銀白色で不透明である。

賢治は、蒼鉛色を、栗林の影や、みぞれを降らす暗い雲を形容するために用いている。妹の死を悼む詩「永訣の朝」では、「蒼鉛いろの暗い雲から／みぞれはびちよびちよ沈んでくる」(『新校本宮澤賢治全集』第 2 巻、詩〔I〕本文篇、138-139 頁)と描写し、詩「どろの木の下から」では、「みちの左の栗の林で囲まれた／蒼鉛いろの影の中に／鍵なりをした巨きな家が一軒黒く建ってゐる」(第 3 巻、詩〔II〕本文篇、42 頁)と表現している。

賢治が新造した蒼鉛色は、不透明で銀白色を意味すると考えられる。(吉村耕治)

## ●大辞泉ひろいよみ 39 お・か

**織り女**：おりめ。機織の女。

**織り目**：おりめ。織り地の糸と糸のすきま。

**織元**：織物の製造元。

**織物**：織機にかけ、縦糸と横糸とを組み合わせ、平たく作った布地。平安時代以降、染め糸や練り糸で織った絹の布地。

**織り模様**：ふはくに織り出した模様。綾・錦・緞子・厚板・縞珍・金欄などをいう。

**温色**：穏やかな顔つき。暖かい感じを与える色。赤・黄・緑とそれらの間色。暖色。反対は冷色。



**画意**：絵画に示された意味。絵の趣。

**絵画**：造形美術の一。線や色彩で、物の形・姿を平面上に描き出したもの。絵。画。

**灰黄色**：かいこうしょく。灰色がかかった黄色。

**絵事**：かいじ。絵を書くこと。絵画の道。

**皆朱**：かいしゅ。朱または辰砂をまぜて全面を赤く塗りつぶした漆塗りの器物。

**灰色**：かいしょく。はいいろ。

**回折縞**：光の回折によって生じる明暗の縞模様。白色光では縞に色がついてみえる。

**灰陶**：かいたう。中国、新石器時代から殷代に盛行した灰青色の土器。唐・宋の頃まで使用された。(永田泰弘)